

竹内愛二教授の功績

—多年の盟友の感慨—

大道安次郎

竹内愛二教授は明年（昭和41年）3月定年退職されることになりました。長らくご昵懇を賜っていた私としては、とくに感慨深いものがあります。

竹内教授を関西学院大学にお迎えしたのは、昭和23年4月で、当時私は文学部（社会学科）の教授をしていました。文学部では戦後の再建と新しい陣容の整備・拡充の気運に溢れていました。社会学科のほかには社会事業学科を新設してはどうかという動きもその一つの現れでした。故ベーツ名誉院長が原田の森時代の関西学院（学院が現在の上ヶ原に移ったのは昭和4年のことですが、それ以前は神戸市郊外の西灘村原田にありました。鬱蒼とした森があったので原田の森といっていました。学院発祥の地です。現在の神戸市西灘区の王子公園あたりです。）に、文学専門部を開設するとき、キリスト教主義による社会事業のことも構想されていたようです。この構想を戦後新しい形で実現してはどうかという意見が、当時の文学部長であった今田恵名誉教授を中心に打ち出されました。当時竹内教授は同志社大学を辞されて間もないときでありました。こんなよい方が近くにいられるのでというので早速お迎えしたわけでした。最初の数年間は文学部の嘱託講師、専任講師として社会学科で私たちと一緒に仕事をされましたが、昭和27年教授になられ、新設の社会事業学科の主任教授となりました。これまで社会学科のなかで育てられた芽が立派に成長し、社会事業学科として独立したのです。そんな関係で社会学科と社会事業学科とは同じ文学部にあってとくに親しい関係がありました。

ところが昭和35年4月に社会学部がスタートしました。幸に文学部内には社会学科と社会事業学

科とがあるから、それを中核として新しい学部を創設してはという構想でした。いわば文学部の母体のうちから、社会学科と社会事業学科とが手を携えて新しい学部の設立に馳せ参じたわけです。

新しい学部づくりにはいろいろな困難なことがあります。いわば処女地に道を切り開くようなもので、教授陣容の整備や学則やルールの確立、学生の訓育など、学部の規格づくりには大変なものがあります。トライアル・アンド・エラーを繰り返しながら、ようやく学部の基礎が固りつつあるというのが現状です。この学部づくりの苦しい時期に、教授は新しい学部の元老として、学部の充実と学生の指導に惜しみない努力と協力を傾けられて、文字通り学部づくりの推進力になられたことは、皆様のすでにご存知の通りです。また真摯なクリスチャンとして社会学部のキリスト教教育（これはいうまでもなく関西学院の建学の精神です）を推進されたことも、とくに銘記しなければならぬことだと思います。

私は教授の社会学部につくされた数々の功績に対して、学部の名において、心からなる感謝の意を表すべきだと思っています。そして、社会学部の歴史に教授の名を大きく書きしるすべきでしょう。

と同時に教授は社会学部における社会福祉学のコースの指導者であったことを忘れてはなりません。教え子の多くは全国各地で社会福祉学の実践や研究に従事しています。大学教授の場合は、優れた教育者であるということは同時に優れた学者でなければならないということが要求されます。学者であることと教育者であることが同時に要求されているわけです。竹内教授は優れた教育者であったと同時に、優れた学者でありました。昭

和35年文学博士（旧制）の称号を授与されていますが、学位請求論文は「専門社会事業研究」と題されています。この研究はこれまでの社会事業研究に一つの新しい領域を開拓したエポック・メイキングなものとして、社会福祉学界で大きな反響を呼び、高く評価されました。私はこの学位請求論文の主査という光栄に浴しましたが、アメリカの社会福祉学の新しい傾向を摂取されると同時に、社会学とのつながりも考慮されており、とくに当時アメリカ社会学界に理論社会学的新風を吸き込んでいた T. パースンズの難解な理論をも取り入れていました。学者としての教授の飽くなき探求心にいまさらながらつくづく心を打たれたことを、いまなお強く記憶に残っています。この学位請求論文は間もなく出版されました。この書物によって教授の学界における地位はますます重きを加え、日本社会福祉会の会長もされました。そのほか社会事業関係のいろいろな学会でも重鎮的存在として重きをなしていることは、いまさら私がここで述べるまでもなく、周知のことがらです。

ところで教授はまた優れた実践家でもありました。社会福祉の実践にも積極的に参加され、推進されています。忙しい時間をさいて、遠隔の地をもいとわず、社会福祉の講義や指導によく出かけていますし、また自らも実践に身を挺されています。たとえば、西宮市門戸に設けられている Community center はそのよい例です。このセンター建設は地域社会福祉の夢を実地に築きあげようとする教授の年来の悲願が秘められていると

思います。この意味で私たちはこのセンターの完成と発展を心から祈っています。さらにまた上ヶ原文教地区の地域社会づくりについても理論的指導者として積極的に推進されています。

学院の制度とはいえ、この竹内教授が来春社会学部の現職から退かれることは、何としても惜しいことであります。教授が学院にこられたのは50才過ぎであるから、最も油ののりきった貴重な時期を、文学部の社会事業学科づくりと社会学部の学部づくりのために捧げられたといえましょう。

私は文学部時代から親しくして頂き、また社会学部の学部づくりには多年の盟友としてともに苦労を重ねてきたことなどを思いおこし、いまさらながら感慨にふけています。また人間の生き方や学問の仕方などについても、無言のうちに、いろいろ教えて頂いたことを感謝している次第です。

定年退職で教授としての現職は離れますが、幸にお宅は学院の近くにありますので、温い目をもって社会学部を見守られ、今後とも学部発展のためにご協力とご援助下さいますようお願い致します。と同時に、教授のますますお健やかなこととご家庭のご多幸なことを心からお祈り申し上げます。

（昭和40年9月25日朝 宝塚紅葉谷にて）

（附記）竹内教授は去る10月文化の日に兵庫県から県文化賞を授与されました。これは当然なことと、教授が兵庫県社会事業界に理論的実践的指導者としての功績を客観的に証明されたこととして、およろこび申し上げたい。